



絵はがき「初代の荒川大橋」(土木学会附属土木図書館所蔵)

# かわはく No.76

## CONTENTS

|                             |   |
|-----------------------------|---|
| 開催案内：春期企画展「荒川今昔写真展」         | 2 |
| 開催案内：スロープ展「歩いて川を知る～荒川本流編～」  | 3 |
| 展示紹介：蔵出しコーナー「酒造りの道具」        | 3 |
| 開催予告：令和5年度特別展「うんち・糞・フンII」   | 4 |
| かわはく子ども交流員                  | 4 |
| 学芸員コラム：寄居町の荒川で、やな漁、が行われていた！ | 5 |
| 学芸員コラム：地域特有の土の名前            | 6 |
| 学芸員コラム：2種のアカガエル             | 6 |
| 川博を辞めるにあたって                 | 7 |
| 指定管理者の更新及び組織替えについて          | 7 |
| イベント情報コーナー 4・5・6・7月         | 8 |



## 開催案内

# 春期企画展 『荒川今昔写真展』

開催期間：2023年3月25日（土）～5月7日（日）

荒川は、年々その姿を変えています。大洪水で川の状況や流路が変わり、河川改修工事で川の姿や環境が変わってきました。特に大正時代以降は、水害を防ぐため河道の直線化、堤防建設、ダム建設などの工事が行われ、また近年は「親水」を目的とした改修工事も各所で行われています。

それでは変貌する以前の荒川はどんな<sup>かお</sup>貌をし、人々の暮らしとどう結びついていたのでしょうか。それを伝えてくれるのが古い写真や絵はがきです。この企画展では、明治以降に撮影された写真や絵はがきをパネルで紹介するとともに、その場所が現在どのように変わっているかを比較することで、「埼玉の母なる川、の移り変わりをテーマにしてみました。

### ◆展示写真

古写真及び絵はがきのパネル 計66点  
(同じ場所の現況写真もパネル展示)

### ◆映画上映（常時）

#### ・埼玉ニュース「荒川」(1955年、9分)

荒川の流れを、産業・経済・自然・風土など広範な見地からたどった映像記録。

#### ・埼玉ニュース「橋」(1956年、4分)

架橋の進歩なくしては経済・文化の発展を望めない。県では650梁の橋完成を目指し、県下各地で建設の槌音を高く響かせている。

### 関連イベント：展示解説

日時：3月26日（日）

①11：20～11：50 ②15：00～15：30

内容：担当学芸員が展示写真の解説と、荒川の移り変わりを解説します。

参加費：無料（開始時間までに第2展示室にお越しください）

定員：各回10名程度

※詳細はホームページ参照、もしくは当館にお問い合わせください。

(研究交流部 大久根 茂)





## 開催案内

# スロープ展 「歩いて川を知る～荒川本流編～」

開催期間：2023年2月7日（火）～6月18日（日）

『かわはくだより』においても、これまでに何度も紹介している、当館開催イベント「荒川ゼミナール」。今回このイベントで歩いたウォーキングコースを紹介する展示を企画してみました。

荒川ゼミナールでは、荒川本流・支流以外にも、利根川流域も含め、主に埼玉県内の河川流域を歩いてきました。これらコースは全て当館のオリジナルコースです。その全てのコースを紹介するのはさすがに難しいので、今回は本流沿いのコースを11コース、厳選して紹介しています。各コースとも、コースの見どころ、歩くことでどんなことが学べるのか、写真を交えながら紹介しています。

自分で言うのも何ですが、紹介した11コースは、どれも荒川の特徴を端的に捉えたものになっており、これらのコースを歩くことによって、現在に至る荒川の歴史とその特徴を知ることができます。

川を知るためにはどんな方法があるのでしょうか？ 本を読む、テレビを見る、インターネットで調べる、様々な方法があるかと思いますが、「百聞は一見に如かず」という諺もあるように、「現地直接見て知る」、この方法が一番ではないかと思えます。これからのシーズンは歩くのに気持ちのいい季節です。皆さんもぜひ歩きながら、川について学んでみてはいかがでしょうか？

（研究交流部 羽田武朗）



荒川の堤防はどこから始まるのか、現地を訪ねるコースも紹介している

## 展示紹介

# 蔵出しコーナー 「酒造りの道具」

展示期間：2023年2月7日（火）～6月中旬（予定）

埼玉県内には2023年3月現在34の日本酒の酒蔵があり、それぞれ独自の銘柄をつけて酒造りを続けています。「蔵出しコーナー」では、平成12年（2000）に上尾市の小林酒造株式会社から寄贈していただいた伝統的な酒造用具の一部を展示しました。小林酒造はJR高崎線上尾駅にほど近い場所で大正13年（1924）に創業しました。越後（新潟県）から杜氏を招き、「東壽」を代表銘柄として平成7年（1995）まで約70年の間営業してきました。

今回は計115点の資料から12点を選んで展示しました。まずは酒造りの仕込みに使われる桶や柄杓を7点選びました。桶類はほとんどが杉材で作られています。酒を入れる容器は3点展示

しましたが、酒屋から貸し出される徳利は「上尾町大石屋」と屋号入りです。また、販売用の容器である樽は銘柄が入り、薦で巻かれた薦樽や陶器製の五升樽です。そのほか、蔵元の名が入った半纏、銘柄が入った宣伝用のホーロー看板を展示しました。展示資料のほかに、長辺が368cmもある酒槽や、直径125cmの大釜も収蔵されています。

（研究交流部 藤田宏之）





## 開催予告

### 令和5年度特別展 「うんち・糞・フンⅢ」

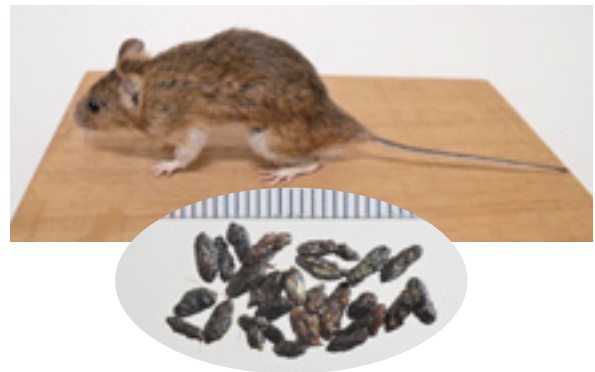
川の博物館の姉妹館である埼玉県立自然の博物館では平成27年度特別展として「うんち・糞・フン～ダンゴムシからゾウまで～」を開催しました。動物たちは生きていれば必ず糞をします。その糞は、その生きものがそこにいたことや、どのような食べ物を食べ行動しているかなど、動物の生態を知る有効な手がかりとなります。前回の特別展では、様々な動物の糞を大きさ・形などの別を中心に紹介しました。

今回の特別展「うんち・糞・フンⅢ」では、改めて糞について紹介します。大きなゾウの糞、あまり見たことがないかもしれない昆虫の糞、カタツムリの糞など多様な糞を取り揃えています！同じ種でも色や中身が異なる糞や野外で見つかる糞の落とし主の正体、それらの糞から分かる事、糞をしない幼虫の話など、動物たちの糞について徹底解説します。

さらに、今回は糞と人との関わりにスポットを

当てます。江戸時代には糞尿、つまり下肥は貴重な肥料として盛んに利用されました。浮世絵や下肥を運んだ船の模型などと共に解説します。他にも鶯の糞を化粧品として利用した「うぐいすの粉」、葉として使われたムササビの仲間の糞など、人が利用してきた糞についても紹介します。また、昔も今も「糞（うんち）」は気になるテーマ…。歴史資料に見る糞についても取り上げます。ぜひお楽しみに！

（研究交流部 森圭子）



アカネズミとその糞

## 開催報告

### かわはくこども交流員

開催：2022年11月～2023年1月（各月1回）

2022年11月から2023年1月にかけて、各月1回、「かわはくこども交流員」を開催しました。

2017年度にスタートし、それから5年間、継続しています。

内容は、カジカチーム（4歳～未就学児）とイワナチーム（小学生）に分かれて、それぞれ交流員のお仕事体験をしていただきます。カジカチームは、お客様に工作の指導を行います。小さな子が、お客様に一生懸命教えている姿は、見ていてとても微笑ましくもあり、ハラハラする事もあります。イワナチームは、実際にマイクを使って鉄砲堰の解説を行います。原稿を読む練習を行い、本番に臨みますが、みんなびっくりするほど上手で大人顔負けです。

また、館内放送も体験していただきます。館内放送は、こども交流員を体験した感想を交えて放送します。「緊張したけど楽しかった」「また体験したい」など、お子様たちには楽しんでいただ

たようです。

こども交流員のイベントは、何度も参加されているリピーターのお子様も多く、特に、マイクで話す鉄砲堰解説の体験が人気です。

5年目を迎えた「かわはくこども交流員」。ようやく冬のイベントとして、定着してきたかなという感じです。来年度も皆様に楽しんでいただける場を提供していければと考えていますので、ぜひご参加をお待ちしています。

（交流員 神保敏子）





## 寄居町の荒川で「やな漁」が行われていた！

「やな漁」という伝統漁法をご存じですか？  
早瀬の一部をせき止めるように斜めに大きな簀子すいこを設置し、流れに乗ってくる魚を捕獲するもので、主に産卵のために川を下るアユを対象にしています。『古事記』や『日本書紀』には、奈良県の吉野川で行われたと書かれているほど古い漁法ですが、今日でも関東地方では利根川や那珂川の各所に「観光やな」があり、捕りたてのアユを賞味することができます。

では荒川ではどうかというと、30年ほど前に皆野町の親鼻橋上流で個人による観光やなが行われていた以外に、詳しいことはわかっていません。

ところが、先年当館が収集した古い絵葉書に、荒川でのやな漁が写り込んでいることに気がきました。場所は寄居町を流れる荒川の、象ヶ鼻と呼ばれる景勝地です。左岸に突き出た岩場の形が象の鼻に似ており、瀬と淵が変化のある流れを作り出しています。絵葉書では荒川の右岸寄りにやなが設けられ、川面には5艘の遊覧船、広い河原には草屋根の仮設小屋も見えます。



絵葉書「荒川名所 象ヶ鼻ノ鮎漁」

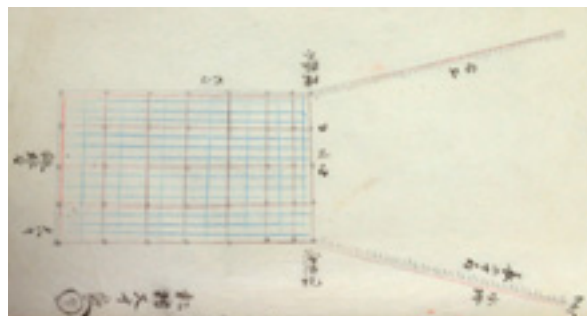
大正元年（1912）発行の『埼玉県写真帖』には、ここと同じ場所の写真を載せた上で（やなは写っていませんが）、「荒川せいたんあゆノ清湍年魚ヲ産ス、大里郡寄居町ノ附近ヲ以テ好漁地トス……都人士ノ来ル者年ニ多キヲ加フ」との解説をつけています。

また、作家の幸田露伴は明治31年（1898）8月に東京の自宅から三峯神社までの旅を記した『知々夫紀行』の中で、象ヶ鼻の岩上に立ち寄ったときの様子を次のように書いています。

川向かわらの磧には、さしかけ小屋して二、三十人ばかりの男打集い、浅瀬の流れを柵して塞き、大きな築やなをつくらんとてそれぞれに働けるが、多くは赤はだかにて走り回れる……

その後、埼玉県立文書館所蔵の資料を調べていたところ、やな漁の申請書が何通か出てきました。旧鉢形村、旧折原村などいずれも現在の寄居町の住民が申請者となっています。年代は明治26年（1893）から同36年までの間で、申請者は計5名です。このうち旧折原村の黒瀬小平次が明治27年の申請書に添付した図面を見ると、やなを設置したのは、絵葉書にある象ヶ鼻のまさにこの場所でした。

また、旧鉢形村の松村又十良が明治31年に申請した場所（築場）は、「小園と保田原との境にある九頭龍石から九十三間の距離」とあり、これは当館の目の前に当たります。この申請書ではさらに、やなの構造についても詳細な図面をつけて説明しています。竹を並べて縦6間、横3間の巨大な簀子を作り、上流側には逆ハの字型に長さ20間の水柵2本を設置して水流をやなに導くようにしています。



やな設置申請書に添付された構造図  
(埼玉県立文書館所蔵)

やなを設置するには、十分な水量と速い流れが必要です。しかしダムの建設や山の保水力の低下などによって、荒川の豊かな流れは過去のものとなり、河床の岩盤が露出してしまったところも見受けられます。寄居町を流れる荒川の各所で、かつてやな漁が行われたことは、新たな発見であるとともに、荒川に再び良好な環境が復活することを願うものです。

(研究交流部 大久根 茂)



## 学芸員コラム

# 地域特有の土の名前

令和4年度冬期企画展「土ウォッチング」中の「かわはく周辺の土ウォッチング」というコーナーでも紹介したのですが、土には地域特有の名前がついていることがあります。地元の方によると「のっぺ」という古い段丘上の火山灰堆積物から出来た土は、水はけがよく、草取りがしやすい土で、サツマイモ、大根、ラッキョウ・ジャガイモを植えるそうです。これに対し、一段下のより新しい段丘面には荒川が氾濫した時の堆積物が風化してできた土があります。こちらは「まつち」とよばれ、土が固く雨が降るとぬかり、白菜・キュウリ・ネギ・ダイズ・タマネギを栽培し、野菜には甘みがでるとのことでした。

埼玉県には土の性質によって呼び分ける地域固有の名称が50あまりあることが昭和38年に農林省が発行した報告書に記されており、埼玉県は全国的に見ても地域名称が多いようです。なぜ埼玉県に地域名称が多いのか、正確な理由はわかりませんが、山地（秩父地域）、丘陵地、台地、沖積地（荒川本流と入間川流域）と、異なる特徴を持

つ地域があり、江戸という消費地をかかえて農業が盛んにおこなわれてきたことを反映しているのかもしれない。

また、「のがた」と呼ばれる台地上の火山灰から出来た土を指すことばは、「野方」という地名にもなっています（現在の東京都中野区野方）。

土の地域名称を調べると、その土地の成り立ちという自然環境と歴史や文化をつなげる鍵になるかもしれません。（研究交流部 森圭子）



一番左が「のっぺ」、右から3つ目が「まつち」

## 学芸員コラム

# 2種のアカガエル

アカガエルと聞いてもすぐに姿を思い浮かぶ方は少ないでしょう。体長が4～7cm程度（メスが大きい）の中型のカエルで、茶色の比較的地味な姿をしています。当館の周辺ではニホンアカガエル、ヤマアカガエルの2種のアカガエル（以下両種）が生息していますが、両種はパッと見では区別が付きにくく、ゼリー状の卵塊も見分けるのが難しいほどよく似ています。生活史も共通点が多く、普段は山林で過ごし、産卵は湿地や河川敷、山を背にした田んぼの水たまりや水路などでおこなわれます。埼玉県では早春の2月頃に産卵を開始し、ヤマアカガエルの方がやや早めに始まります。

両種は埼玉県では比較的にきれいに棲み分けられています。平地が広がる県土の東側はニホンアカガエルの分布域、山地が連なる県土の西側はヤマアカガエルの分布域です。しかし両種の分布域が重なる区域が県土のほぼ真ん中の丘陵地帯に存在していますが、当館周辺はそこに含まれています。つまり当館周辺は両種の分布の境界線・緩衝地帯になっています。

当館から2kmほど荒川を遡ると玉淀河原と言われている広い河原がありますが、岩場に水たまり

があり、ここでは両種が産卵場所を巡ってライバル関係にあります。岩場の水たまりは干上りにくく流れがなく両種の産卵に適しているため、2月中旬ぐらいから産卵期になります。筆者が観察を始めた2010年から2017年まではニホンアカガエルしか確認されていませんでしたが、2018年2月に初めてヤマアカガエルの卵塊を確認しました。それから卵塊はじわじわとヤマアカガエルが増え、ニホンアカガエルは次第に減り、2022年はついにヤマアカガエルだけになってしまいました。しかし、玉淀河原近隣の鉢形城址公園ではニホンアカガエルが確認されていることから、今後巻き返すことも考えられます。両種が暮らすことができる環境自体が減っている昨今、ライバル関係が続いてくれることを願うばかりです。

（研究交流部 藤田宏之）



ニホンアカガエル



ヤマアカガエル



## 川博を辞めるにあたって

川博に来て早や15年、もうすぐお別れです。振り返ると、いくつか曲がり角がありました。高校3年で進路を考える時、土木技師の父の影響で、漠然とその方面と。受験勉強に飽きた時、中尾佐助の「栽培植物の起源」の謎解きのような空間に魅了されました。推理を働かせなぞ解きをしていく、進路変更を担当に伝えたら呆れられました。これが一つ目。初心を忘れ、大学では学園紛争、新宿ペ平連の集会、府中の競馬場の外れ馬券の舞い散るさま、時々自然の風景などを撮っていました。その頃、頼まれたのが、中央アルプスの高山ポドゾルの土壌断面と風景の写真でした。山に行けるなら、土壌の分野もありとその方面に進み、高山ポドゾルが生涯の研究テーマとなりました。

これが二つ目の曲がり角。その後国立科学博物館で、植生に与える土壌の役割について研究と学術的な土壌モノリス（土壌標本）を採取し展示にも使いました。新潟市の「水と大地の芸術祭」で、美術館に展示する



土壌モノリスを作成しました。これが三つ目の曲がり角。芸術作品としての土壌モノリス、懐疑的でした。水田土壌の横幅3mの作品やオイルサンドの高さ3mの作品を展示したら、元々イメージしていたものとは違う、気品のある色調の作品が浮かび上がり、感激もひとしお。照明により、具象であるが抽象的かつ日本画風の色調で鑑賞出来、別次元の土壌モノリスがそこにありました。

曲がり角は、振り返ってみるとあの時が曲がり角だったなとわかります。これから先、まだ曲がり角はあるのか非常に楽しみで、わくわくします。ひょっとしたら川博に勤められたのも曲がり角の一つ？ 皆さん長い間ありがとうございました。

(館長 平山良治)



## 指定管理者の更新及び組織替えについて

2022年7月8日から募集を開始した埼玉県立川の博物館の指定管理者については、埼玉県議会定例会の議決を経て、弊社株式会社乃村工藝社が指定されました。乃村工藝社は川の博物館が指定管理者制度にて民間事業者へ運営管理を委託した2008年度の1期から3期まで15年間の事績と、次期指定管理者5年の事業計画が評価され、引き続き指名を受ける事になりました。3期までの15年間では、荒川大模型173の修繕や大水車が改修されて再び日本一となった一方、2019年10月の台風19号による大きな浸水被害を受け、1か月後に仮オープンにて再開したものの、2021年度に埼玉県の災害復旧予算と一部国の復旧予算にて現状復旧工事が完了しました。

また、2020年度1月より全世界でパンデミックとなった新型コロナウイルス感染症が我が国にも拡大された影響により、長期間の臨時休館も余儀なくされました。そのような中で県と連携し、甚大な浸水被害を受けた「荒川わくわくランド」をはじめとする施設の復旧に努めるとともに、感

染症の拡大防止対策と県民へのサービスの維持に取り組んでまいりました。

次期指定管理の5年間については、自然災害や感染症の影響による時代変化の中で、展示や教育普及を行い、後世に継承する「川の国さいたま」の博物館として、学び・レジャー・交流の場としての充実を図ってまいります。

そして新たな指定管理のスタートにあたり、安定した運営を継続しながら、平山良治館長に替わり小川義和館長が着任し、統括マネージャー、学芸部長、学芸員、管理部スタッフ、交流員などの一部入れ替えを行います。また、組織としてはこれまで経営管理部、研究交流部など「部」としていた部門を「グループ」とし、業務部門としていた交流員グループも含め3グループに改編したうえで、それぞれグループマネージャーを置き、館長・統括マネージャーを中心とした組織体制を構築します。

(統括マネージャー 二川真一郎)

### 4月

3/25/土~5/7/日

春期企画展「荒川今昔写真展」

2/日

かわはくであそぼう・まなぼう

「かわはく桜マップづくり」

時間：13：30～15：30

内容：かわはく内の桜をめぐる、ウォークラリー形式でマップを作ります。

かわはく季節のイベント

「かわはくで桜とスポーツを楽しむ」(雨天中止)

時間：①10：00～②13：00～

定員：各回20名程度

内容：寄居町のご当地スラッシャー『桜戦士セレジェイラ』

『キジの戦士ファイサオ』『みかんキッド』と一緒に桜の下で運動しよう。かわはくで咲いている桜を中心とした、桜のミニ写真展も開催します。

16/日

かわはく研究室「オタマジャクシを観察しよう」

時間：13：30～15：30

内容：早春に産卵するカエルのオタマジャクシを観察します。その生態や卵の違いなども解説します。

22/土

かわはく体験教室「泥染めに挑戦」

時間：13：30～15：30

定員：15名

内容：土を媒染剤にして布を染めます。また、赤い土をすりこんで染める方法も試します。

23/日

荒川ゼミナール 川を知るウォーキング「元荒川を歩く4～備前堤を訪ねる～」

時間：9：30～15：30

定員：20名

内容：元荒川と綾瀬川の流れを決めたといわれる、備前堤を訪ねます。

### 5月

5/27/土~6/18/日

5月企画展「東京藝術大学学生による『河川・水系』作品展」

5/3/水・祝~5/5/金・祝

かわはくGWイベント

時間：10：00～16：00

内容：楽しいイベントを予定しています。

5/金

かわはくであそぼう・まなぼう

【地質の日記念】ストーンペインティング

時間：13：30～15：30

内容：荒川の小石に絵を描く体験をします。

7/日

荒川ゼミナール 川を知るウォーキング

「荒川の狭搾部を歩く2」

時間：10：00～16：00

定員：20名

内容：広大な河川敷を有する荒川流域で、昨年度に引き続き、川幅が特に狭くなっている地点周辺を歩きます。

20/土

かわはく体験教室「光る!泥だんごづくり」

時間：13：30～15：30

定員：15名

内容：粘土の多い土を使ってピカピカ光る泥だんごを作ります。

20/土

リバーコーミング

時間：9：30～11：30

定員：20名

内容：荒川流域の河川敷のゴミや漂着物拾いを通して、環境問題について意識を高めてもらうとともに、荒川流域の環境改善に貢献することを目的とします。

21/日

かわはく研究室「水車のエネルギー」

時間：13：30～15：30

内容：水車の動力の伝わり方について、模型を使って説明します。

### 6月

4/日

かわはくであそぼうまなぼう

【環境の日記念】水質調べ

時間：①10：30～12：00 ②13：30～15：00

内容：環境の日にちなみ、バックテストで水質調査の体験をします。

17/土

かわはく体験教室「竹の水鉄砲づくり」

時間：13：30～15：30

定員：15名

内容：竹を使って手作り水鉄砲を製作します。

11/日

かわはく研究室「水害について考える」

時間：13：30～15：30

内容：荒川大模型173を使用して、近年の水害について考えます。

6/19(月)～22(木)は  
集中保守点検に伴う  
臨時休館です。



### 7月

7/8/土~8/31/木

特別展「うんち・糞・フンII」

9/日

かわはくであそぼうまなぼう

【川の日記念】七夕かざりづくり

時間：①10：00～11：30 ②13：00～15：00

内容：川の日を記念して、七夕かざりをつくります。

15/土

かわはく体験教室「ちりもんを探せ!」

時間：13：30～15：30

定員：25名

内容：シラスの中のちりもんを探します。

16/日

かわはく研究室「土の特徴を調べよう」

時間：13：30～15：30

内容：土の特徴を調べるにはどうしたらよい? いくつかの土を例に簡単な調べ方を紹介します。

17/月・祝

特別展 展示解説

時間：①11：00～②14：30～(各回30分程度)

定員：各回10名程度

内容：担当学芸員が展示の見どころ、ポイントを解説します。

23/日

特別展開連イベント「みみずのうんちストラップづくり」

時間：①11：30～12：30 ②14：30～15：30

定員：各回10名

内容：ミミズの糞でストラップを作ります。

ホームページでも紹介しています!

<https://www.river-museum.jp>

【お願い】①イベントは諸事情により変更になることもあります。ご了承下さい。②☎印のついた行事は事前申込みが必要です。費用に「保険料」が含まれるイベントの申込締切日は、各イベント開催日の2日前までです。③定員になり次第締め切ります。

編集・発行

埼玉県立川の博物館

〒369-1217 埼玉県大里郡寄居町大字小園39番地  
TEL/048-581-8739(研究交流部) FAX/048-581-7332  
ホームページのフォームからお問い合わせいただけます。



2023年3月30日発行

